第一部 各地域における東日本大震災

B 宮古地域

第8章 赤前地区(津軽石地区赤前

伊藤好英・金 鉉哲

2

1 概要

波の大きな被害を受けた。の5つの行政区に分かれている。この5つの地域のすべてが、今回津の5つの行政区に分かれている。この5つの地域のすべてが、今回津津軽石地区の赤前は、赤前上・赤前中甲・赤前中乙・赤前下・堀内

の麓まで達している。いるという地形で、かつての津波でも、波はこの平野を飲み込んで山湾に接し、西には津軽石川が南北に流れ、南側と東側には山が迫って部東側に位置する地域である。湾の南側に広がる平坦部は、北は宮古この地域は、宮古湾がもっとも奥に入り込んだ最南端の、南側と一

赤前上・中(甲乙)・下の集落が形成されていた。られ、その南の平野部の道路と、山沿いを走る主要道路に沿う形で、に位置する。そして、平野の北側の防潮堤寄りには宮古運動公園が作走って堀内の集落前に到っており、堀内の集落は、その防潮堤の東側東西に走る防潮堤が、平野の東端から鍵状に曲がり、湾に沿って北に東回の大震災前の集落の状況を述べると、まず、この平野の北側を

落のおよそ半分とを、一瞬のうちに飲み込むものとなった。 今回の津波は、4つの集落を含むこの平野のほぼ全域と、堀内の集

は、 を塞がれた波は、そのまま湾内を東北に走って、北から来た波とぶつ の際まで到達した。一方、湾の西南の水門と防潮堤にぶつかって進路 の際まで到達した。一方、湾の西南の水門と防潮堤にぶつかって進路 の際まで到達した。一方、湾の西南の水門と防潮堤にぶつかって進路 の際まで到達した。一方、湾の西南の水門と防潮堤にぶつかって進路 のような状況の中で、今回の津波による赤前・堀内の地域の被害は甚 のようなが、それを乗り越えて運動公園を破壊し、勢い

そのうち字赤前の死者は、1人の死亡認定者を含めて26人であった。今回の大震災による死者の人数は、津軽石地区全体で57人であるが、

地震直後の避難状況、避難直後の避難所での生活

と、佐々木平一郎さんの4人である。伺ったお話を以下に記す。前の町づくり検討会の会長で、仮設住宅にお住まいの宇都宮拓治さんを伺った。地域の防災会の会長の村松岩蔵さんと村松さんの奥様、赤況、避難直後の避難所での生活等について、赤前に住む方々からお話大震災から2年近くが経過した平成25年2月に、地震直後の避難状

【村松岩蔵さん(昭和10年生)と奥様の話

〈平成25年2月18日午後、村松岩蔵さん宅にて〉】

[村松さん]

なり、卒業する15人が新保育園で卒園式の練習をしていた。いた。保育園を新しく改築して、そこで保育園の卒園式をすることに赤前では、保育園改築のために、漁村地域センターを臨時に借りて私は、赤前で保育園の理事を何年も任されていた。

難させた。 難させた。 か園児を、漁村バスセンターのバス1台と職員達の自動車2、3台で避電話も全く繋がらず、ほとんど連絡が取れない状況だった。60人余りどの地震だと津波が来ると考え、園児達を、赤前小学校に避難させた。どの地震だと津波が来ると考え、園児達を、赤前小学校に避難させた。 震が来た。子供達を建物の外に出している時、地震がやんだ。これほ乗りの園児は漁村地域センターにいて、私もそこにいた。その時地

を避難させたりもした。とりあえず小学校の体育館に避難した。避難させるかわからなくて、混乱状態だった。一時的に裏山に子供達た。こちらは、職員2人ぐらいしかおらず、大勢の子供達をどの様に本園園児の15人は新築の保育園にいて、職員達の多くもそちらにい

波が防波堤にぶつかって物凄い水柱が立ったのが印象的だった。湾の波だ」という大声が聞こえた。津波が防波堤を越えたという大声。津体育館はいろいろなところから来た人達で一杯だった。その時、「津

が、まともに使わないうちに津波が全部持って行ってしまった。1年目だった。2011年春から本格的に使用する事が決まっていた近くに新しい野球場が作られて間もない時期だった。建築からわずか

寒い日に海水に浸かり寒さに震える人々を皆で助けた。とりあえずその人たちに、プールにあった水を湯に沸かして配った。避難所の体育館には、津波で流されたが助かった人々も来ていた。

ぐに建物を取り壊して、今はさら地になっている。か前の地震の時に梁が落ちて、そのままになっていた。津波のあとすりの被害を受けた。とうてい再使用できないほどの被害だった。何年漁村地域センターは、もと小学校があった場所だった。ここもかな

た。そこもあぶなくて3階に避難した。先生も生徒たちも全員が無事だっそこもあぶなくて3階に避難した。先生も生徒たちも全員が無事だっは海抜ゼロ㍍だ。津波のときは授業中だった。最初、2階に逃げたが、がなかった。近くにある工業高校よりも高いところにある。工業高校本園式の練習をやっていた新築の保育園は、地震に対して全く問題

全員無事だった。このことは非常によかったと思っている。 赤前は、工業高校も小中学校も保育園も、生徒・児童・園児たちは、

に。ただ逃げるだけの避難訓練は限界がある。また、今まで津波を、予想以上に津波が高く上がって、津波を見ていて流された人達がい

ら問題ないと安易に考えていた。何十だ程度という感覚で捉えていたことも問題であった。この程度な

きなかった。これも大きな問題点だ。ほとんど麻痺していたので、修正された2回目の放送を聞くことがでしかしこの2回目の速報は全く聞くことができなかった。通信手段が最初の放送で3㍍という速報を聞いたが、後で6㍍に修正された。

ることができない状況だった。まっていた。緊急状況にもかかわらず、消防車が全く被害地域まで来が生じた。電信柱が道路に倒れ、津波で流れてきた物があちこちにた海岸の村はほとんど全部孤立した。 特に道路が流失して多くの問題

んど無かった。 で入って来られないという問題が生じた。 食べ物の供給が3日間ほとで発って来られないという問題が生じた。 食べ物の供給が3日間ほと避難道の確保も重要だ。自衛隊のトラックが、海岸道路からは村ま

式あったが、それ以外、学校にはほとんど米が残っていなかった。使って食事をすることができた。白米は小学校に給食用のセットが1小学校の給食センターに大きな釜が残っていて、避難所ではそれを

のゴミが入り混じった汚染された水なのだ。飲んで、下痢をして苦労した人々もいた。津波の水というものは全て海水につかった米は食べられなかった。実際、津波に汚染された水を主な農家はみな流された。倉庫も全部津波に流された状況だった。

に避難所には必ず必要である。からは非常用発電機を準備しておくことが何より重要だと考える。特からは非常用発電機を準備しておくことが何より重要だと考える。され幸いこの地区に、津波に流されなかった発電機が1台あった。これ

認識できた。 で見わけがつかない状況だった。水できれいに洗って、はじめて人とで見わけがつかない状況だった。水できれいに洗って、はじめて人と!波に流されて死んだ人達は、あまりにも酷く傷んで泥まみれなの

何か重たいものに触った。よく見ると人の指が見え、その指には指輪17日目にやっと家の周囲のゴミを片づけることとなった。その時、

たと思っていた。しかしその自動車の下で死体を発見したのだった。2台が津波で流れてきていたが、自動車の中には人がいないので良かっが見えた。若い女性と思われる死体を発見した。その場所には自動車

[奥様]

「寸公さら) で、それにつかまった。すると横を自動車が流れ過ぎるのが見えた。たので、それにつかまった。すると横を自動車が流れ過ぎるのが見えた。てきた。 玄関を出るともう胸まで水が来ていた。 子供たちの遊具があっ津波が押し寄せる音は全く聞こえなかった。 突然門の前まで水が入っ私は、津波がうずを巻いて押し寄せて自動車を飲み込んだのを見た。

杯入っていて、戻ることができない状況だった。に家を建てた。園児たちを避難させた後、見ると、家にはもう水が一自分たちが住んでいる家までは津波が来ないと思った。それでここ

することが重要だと思う。
たちも、津波の避難道の事はよく知らなかった。普段から避難訓練をの山に、津波の時の避難道があるということさえ知らずにいた。子供の山に、津波の時の避難道があるということさえ知らずにいた。子供た生たちは、殆どこの地域の津波の危険性を知らなかった。村の後地域住民達は津波に対する不安と恐怖を持っていたが、盛岡から来

にも模型を作って状況を予測したりもした。でに作られていて色々な被害状況を予測することができた。災害の後到達するのか知ることもできるように作った模型。津波が来る前にす工業高等学校にある津波模型について。水を注げば津波がどこまで

を使えない状況だった。スパークして火災が起きる可能性が高かった。1か月の間は全く電気スパークして火災が起きる可能性が高かった。1か月の間は全く電気全部使用不能。ボイラーまで使えない状況。誤って電気をつけると、津波以後、電気製品はほとんど使用できなかったし、コンセントも

ずして体に巻いて寒さを凌いだという。 孫は水産高等学校に通っていた。寒さが我慢できず、カーテンをは

たちは自分の家を探せない状況だった。る孫が帰って来ないので非常に心配した。途中の家が無くなって子供る孫が帰って来ないので非常に心配した。途中の家が無くなって子供1日経って子供たちは家に帰ってきたが、水産高等学校に通ってい

隊がきて基本的な処理が開始された。 道は完全にわからなくなっていて電柱が倒れている様な状況。自

が、村の人の約半分が残っていた。
できてからも、村の人達は共同でこれを管理して使っていた。組合員得ることができた。山の上の水があったために皆が助かった。水道がで生活していた記憶があった。その記憶を生き返らせて、食用の水を食用の水は山の上から汲んで来た。水道が入る前に、山の上の湧水

学校で電気を使うことができるようになった。 学校で電気を使うことができるようになった。高校生が朝からプールの水を汲み、トイレの掃除もし、食事の仕度も助けた。からだの具ルの水を汲み、トイレの掃除もし、食事の仕度も助けた。からだの具単がの体制を作ることができた。先生も1週間は家に帰らないで学は民が一致団結することができた。先生も1週間は家に帰らないで学域民が一致団結することができた。先生も1週間は家に帰らないで学域民が一致団結することができた。年生も1週間は家に帰らないで学域民が一致団結することができるようになった。学校が中心となって地がでで電気を使うことができるようになった。

ステムができた。との間間ほど後に、どの病院でも薬を処方するシきる人は僅かだった。1週間ほど後に、どの病院でも薬を処方するシできていた。薬が必要な人達も多かったが、薬を手に入れることがでガソリンも1人当り一度に5別しか買えなかった。いつも長い列がガソリンも1人当り一度に5別しか買えなかった。いつも長い列が

残っている。 赤前は鮭の孵化場の始まりの場所である。孵化場の元の場所がまだ

これが、実際に津波が来た時いろいろ役に立った。津波がくる前の3月3日、たまたま避難時の役割分担を行なったが、

犯と見える人がいて、注意を与えたりもした。周囲の人々も皆その人た。防災会の会長の自分は、監視役もしなければならなかった。常習ポケットにドライバーを入れて歩きまわっている若いカップルもあっ子供を連れてきて、物を盗んでゆく若い女性達もいた。ズボンの後ろ被害地域の家具やカバンが全部空っぱになっていることが多かった。

を警戒していた。

【宇都宮拓治さん(昭和5年生)の話

にて〉】 〈平成25年2月18日午後、赤前小学校仮設住宅の宇都宮さんのお部屋

る委員会を設置した。私は会長を頼まれた。を受けていた。会議が行われ、20人程のメンバーで、意見を取り纏めとの委員会の結成を誘導した。320世帯のうち、150世帯が被害「町づくり委員会」を平成23年の9月中に設立した。役場が、地域ご

子供たちのためにもそれが一番重要だと考えた。暮らせる場所を確保することが何より重要だという意見に一致した。ついて会議した。委員たちも被害を受けていたので、安全、安心して9月中に委員会が設立されて、月1回集まって、4回程、町作りに

提出した。町作りが現在進行中である。いて、住民たちが願う高台その他の候補地域を決めて、意見を市長に12月には全地域の総会が開かれ、専門のコルサルタントの意見を聞

があった。とができなくても子供たちには安全な場所を確保したいとかいう意見とができなくても子供たちには安全な場所を確保したいとかいう意見早く仮設住宅から出て次の段階に進みたいとか、自分たちは戻るこ

に移転できる方法があれば移転したいと言っている。 域住民の中には浸水被害がなかった人達もいるが、その人達も、一緒安心して住むことができないので、戻る事を主張する人はいない。地ない。もとの場所に戻りたい気持ちはあるが、実際には危険な場所に、式を希望している。宮古市と地域の方針が一致しなければ、先に進ま式を希望している。宮古市と地域の方針が一致しなければ、先に進ま式を介望を重で色々状況が違うので条件が複雑である。80才以上の山の上の高台の設計図を作って、再び交渉することに決定した。人

の山道を通って妻を連れに戻った。 津波訓練のとおりに行動しようと車場で地震が来て、大きな津波が来ると直感的に認識した。急いで後地震があった日、私は軽トラックに乗って千徳に買物に行った。駐

心った。

軽石小学校に通っていた孫も無事だと、後で聞いて安心した。 津人で歩いて赤前小学校に避難した。子供たちは市内に住んでいた。 津だ」「逃げろ」という大きな声を聞いて、人々も避難を始めた。[津波クに物を積んで浜を見たら、20㍍以上の津波が白く見え始めた。「津波家に着いて位牌を持って外に出た。家からは海が見えない。トラッ

員たちが水門を閉じに行って、水に濡れて戻って来ていた。 避難所(小学校)は、いろいろな人達でごった返していた。消防団

こともあった。

こともない

こともない
こともない

こともない

こともない

こともない
こともない

こともない

こともない

こともない
こともない

いたので最も大きな助けとなった。道を繋げたりという仕事。自衛隊は災害に関する様々な設備を持って自衛隊が来て、いろいろ助けてくれた。ゴミを片づけたり、途切れた一緒に行なった。一番大変な事をしたのは自衛隊だった。1週間後に死亡者は警察の管轄だったが、いろいろなことを自衛隊と消防団で

て電気を供給した。やっとテレビが見られる状況になった。毛布などが準備されていた。1週間ほど後に東北電力でも車両を出し学校には防災に関連した物が準備されていた。学校の中に水、食べ物、

いる。もいたが、本当に熱心に被災者達を助けてくれた。皆が大変感謝してもいたが、本当に熱心に被災者達を助けてくれた。皆が大変感謝して先生達には大変お世話になった。先生の中には自分の家が流された人避難時に、大変お世話になったのは学校の関係者であった。校長と

情報がなかった。市役所のサイレンも鳴らなかった。無線であっても、最初3㍍の津波警報が出た後は、無線の問題なのかわからないが全く善今まで何回も津波が来たが、今度のものは、本当に大きい津波だった。

は早く解決されなければならない。電源が全部切れたら完全に不通になることはわかるが、この様な問題

ろ防波堤が高いので、人々は津波の状況がわからない。に避難のための半鐘があれば良かったのではないかと思う。今はむしチリ津波の時、人々は半鐘の音を聞いて避難した。今でも昔のよう

平成28年頃ではないかと思う。 高台移転について、今年3月頃測量が開始され、宅地ができるのは

解決するのかが問題だ。 高齢になると銀行でも融資をしてくれない。この問題をどのように

減ってしまうのではないかと心配だ。 ようという意識が強い。しかし結局は、津波以前の人口よりはかなりようという考えはないが、ここが故郷の人達はまたもう一度帰って来他の地域に住むことも多い。 ここが故郷でない人達は、また帰って来京や埼玉に出て行った人が多い。若い人達は家族を連れて宮古を離れ、津波によって工場や会社が無くなった。職場が無くなったために東

要性が改めてわかった。
地震が来たら、先ずドアを開けるように幼い時から教わっていた。
地震が来たら、先ずドアを開けるように幼い時から教わっていた。
地震が来たら、先ずドアを開けるように幼い時から教わっていた。
地震が来たら、先ずドアを開けるように幼い時から教わっていた。

余りに狭い仮設住宅で受けるストレスは確かにある。ということはない。それで内部では特別問題が起こらない。しかし、仮設住宅の人達は全てを失っているので、誰が良く誰が悪い状況だ

【佐々木平一郎さん(昭和20年生)の話

《平成25年2月19日午後、赤前小学校仮設住宅の集会所にて〉】

見付けた。その人を車に乗せて赤前小学校まで運んだ。 地震が発生して10分後、避難しようとした時、車椅子に乗った人を

以上の津波が来るだろうと思った。 有線放送で津波3㍍という情報があった。直感的に湾には多分6㍍

べるご飯がないという声が聞こえた。米を少しずつ集め始めた。避難所にいた人々は450人くらいになった。一段落した後、今日食小学校の避難所から、津波が押し寄せて来るのが見えた。津波の後、

張って来て車に乗せて小学校に運んだ。救助に向かった。溺れていた2人の人を助けて、浮きものに乗せて引っ降りて行った。船が全くなかったので浮きものを臨時に作って海岸に私は消防団の人と一緒に、津波に流された人々を救うために海岸に

められた。 村人の中に死亡者も出たので、その人達を確認する作業が同時に進

を準備することができた。沢の水もあったので、ある程度食べ物らもらって来ることができた。沢の水もあったので、ある程度食べ物民150人分くらいのおにぎりも準備した。米は被害が無かった家かその釜でおにぎりを作った。450人分作った。工業高校にいる避難て、やっと電灯がともった。小学校には昔の給食設備が残っていたので、避難所には小さな発電機があり、それにもう1台発電機を借りてき

れも潮流の問題で、なかなか複雑である。の家がかえって沢山流され、低い所の家が助かっている例もある。こめ家がかえって沢山流され、低い所の家が助かっている例もある。こめ家がかえって沢山流され、低い所の家が助かっている例もある。この家がかえって沢山流され、当時では一次ではないかのではないか。高い所見た。そのうちの1つは巨大な水柱を作ったが、これは2つの潮流が見た。そのうちの1つは巨大な水柱を作ったが、これは2つの潮流が見た。そのうちの1つは巨大な水柱を作ったが、これは2つの潮流が見た。そのうちのと

部流されて何も無かった。唯、ゴミの山だけ。臭いはと聞かれても、で宮古を離れていた。津波の後、家はどうなったかと聞かれても、全の人を車に乗せた。妻は仕事で外に出ており、子供たちは職場の関係だった。運転免許証の入った小さなカバンだけを持って出て、車椅子地震直後の話にもどるが、家に行ってみると、家の中はめちゃめちゃ

度しか入れられなかった。 度しか入れられなかった。ガソリンは1回に20以、あるいは2千円程 で時間がかかったようだ。ガソリンは1回に20以、あるいは2千円程 の家に行っていたということがわかった。子供が妻の安否を知らせる の家に行っていたということがわかった。子供が妻の安否を知らせる かった。携帯電話が繋がらない状態だった。妻との連絡が取れず大変 どんな臭いがしていたか全く記憶が無い。家族との連絡は全く取れな

認できない状況だった。の次の日に来て状況の把握を始めた。しかし3分の1程度は安否が確の次の日に来て状況の把握を始めた。しかし3分の1程度は安否が確父母、兄弟、子供たちの安否をお互いに確認した。市役所の人達もそ津波の次の日の夕方には、地元の人達の安否を確認する作業をした。

は3世帯ほどで、そのほかは被害が深刻だった。 担当地域は72世帯、およそ210名程であった。被害が全くない家

たが、帰る手段がなかった。は近所の工場で働いていた人達も来ていた。その人達も家へ帰りたかっは近所の工場で働いていた人達も来ていた。その人達も家へ帰りたかっ行なった。自分達で顔を見て確認したのは当日だけだった。避難所にその次の日から消防団と自衛隊、警察が入ってきて、死体の確認も

ので、材料だけ受け取ってそれを作り直して食べた記憶がある。けてくれた。しかし自衛隊の食糧は余りにも脂が多くカロリーが高いたので、焚いて食べる事ができない状況だった。自衛隊が食べ物を分なったという話が出た。もちろん米は残っていたが、精米をしてなかっ3日間、おにぎりとみそ汁を作って食べた。3日程経つと米が無く

いをしてくれた。 いをしてくれた。 いかの先生は子供たちを連れて更に高い所に移動した。先生たと考え、女の先生は子供たちを連れて更に高い所に移動した。先生た地震の時、小学校は授業中だった。もしかして危険なのかも知れないある物は何でも使っていいと言ってくれた。校長の家も被害を受けた。小学校の校長先生にとても感謝している。津波の直後から、学校に

を主に使用した。復旧計画としては、県道41号線を高い所を通して活赤前の下組は72世帯だ。下の道は殆ど使用できなかったため、山道

用する事が考えられる。また今の山道を再整備する事も必要だ。

多い。その増えた部分は全部津波に持って行かれた。てている人たちもいる。赤前地区には新しく引っ越してきた人たちも住む人たちと、またいくらかは他に行くと思う。現に今よそに家を建善赤前のこれからについて。高台に移転する人たちと公営災害住宅に

が終われば工事が始まるものと見ている。公営住宅は、土地の買収が終わり、3月中には遺跡調査を始め、調査公営住宅は、宅地造成は、平成26年の秋頃になると聞いている。災害

然また作る事に決定されて、説明会を開く事になった。初めは住民たちの意見を聞いて、水門を作らないことになったが、突ともならなくなっているのではないか。閉伊川河口の水門についても、当に形だけだ。全部県の指示で、市長も頭をぐっと抑えられて、なん実際、復興計画はこれまでいろいろ集まって話をしたが、それは本

が出ている。これは矛盾だと思う。 ばそれから上は大丈夫だということだが、市役所が移転するという話し寄せて来るわけだ。それを心配して反対したのだが。水門ができれよって、閉伊川をよじ登って行った水が今度は、こちらの奥の方に押水門については昔からいわくがあったようだ。水門ができることに

更ご。 今、住所を変更すると、すべての書類を変えなければならないので不今、住所を変更すると、すべての書類を変えなければならないので不善郵便物は昔の住所に送れば、郵便局から仮設住宅に届けてくれる。

また学校の下に使っていない畑があった。農機具は流されて何も無かっる。そこで学校の中に花壇や農地などがあり、野菜畑を作って栽培した。仮設住宅には高齢者が多い。1日中何もすることがないと気が滅入

いる。で何かを植えていく計画だ。お茶会なども3、4日に1度くらいやってで何かを植えていく計画だ。お茶会なども3、4日に1度くらいやってもらった。その畑は80坪くらいだった。それを8等分して、10人ずつたが、無料で提供してくれる人たちがいた。色々な機具を10個くらい

大変だったと思う。 し仮設の人たちは、それらをみんな買わなければならなかったので、仮設住宅には、電化製品や、必要な家庭用品が揃っていたが、みな

て78世帯になった。 ほど。駐車場の問題があるのでその数だったが、その後駐車場を作っ用の土地を提供してくれたので早く入ることができた。最初は50世帯平成23年5月17日に仮設住宅に入ることができた。学校で仮設住宅

ここの仮設住宅は85%が地元の人たちが入っている。外から来ている意見を集約することができず、自治会を作るのが遅れる地域も多い。では談話室となる。談話室は、部屋を2つ繋いだ程度の小さな空間だ。はなければならない所もある。集会所が作られたが、小規模仮設住宅よそでは市役所で集会所の鍵を管理しているので、毎回使用許可を受よる。かじめ作っておいたので住民自身で住宅を管理できた。

先生という。 ら、5、7歳だろう。今でも時々お出でになる。お名前は及川総逸郎年の4月から水沢に転勤になった。あと3年くらいで定年だというか校長が自治会を作らなければだめだと言って、早く作った。校長は去人達が多い仮設では、なかなか意見が纏まらないようだ。ここは、学

言っている。 興を進めてほしい。特に年をとっている人は、自分の家で死にたいと興を進めてほしい。特に年をとっている人は、自分の家で死にたいというのが皆の本音だろう。そのために早く復

んさ」は津軽石小学校では、低学年からやっていた。子踊り」をした。津軽石の元町では、「津軽石さんさ踊り」をやった。「さ津軽石中学校で子供たちが自分達で「鹿子頭」を作って、文化祭で「鹿

復興状況と3年前の体験(大震災から3年)

3

3年前の体験等を中心に赤前の方々からお話を伺った。 大震災から3年が経過した平成26年3月10日と11日に、復興状況や

日はその準備の日であった。 た脇に設置された防災備蓄倉庫の前で防災訓練を行うこととなり、10赤前上(かみ)組でも11日に、赤前上組会館とその前の道を少し登っ11日は、震災の日に合わせた宮古市全域の防災訓練の日であった。

のお話を伺った。 復興の状況や震災の前と後の集落の変化、津波直後の集落の様子など3月10日は、赤前上組会館で、上組の防災会会長の村松岩蔵さんに、

きさんに、津波当日の人命救助のお話を伺った。 津波が到達した境界地点で、赤前上在住の堀内光得さんと山根ひでゆる月11日は、防災訓練が終わった後、防災備蓄倉庫付近の路上と、

【村松岩蔵さんの話

〈平成26年3月10日午後、赤前上組会館にて〉】

から即席五目飯を戴いたので、明日炊き出しの訓練として使うことに明日の避難訓練は地区ごとに行われる。市の管理課(危機管理課)

である。とに、自主的にやるのが本当だ。地区ごとに避難のやり方が違うからとに、自主的にやるのが本当だ。地区ごとに避難のやり方が違うから波に備えて、これまでも避難訓練をやってきた。避難訓練は、地区ごした。赤前上自主防災会は、結成してから10年経つ。大きな火事や津

が流された。その方々は今仮設に入っておられる。とき、私ども赤前上の町内は120棟あったが、そのうち半分の家屋津波の時は、赤前は小学校に避難することになっている。3・11の

資材倉庫は会館前の道を少し上に行ったところにある。流された。明日は、発電機等、設備を披露する。昨年の12月に準備した。赤前地区の会館のうち、残ったのはここだけだ。他の会館はすべて

係の仕事をしている。 はの仕事をしている。 をいと思う。本当は戻って来ていただきたい。そうすれば若い人たちないと思う。本当は戻って来ていただきたい。そうすれば若い人たちんど流されて、今は町の方に出て行ってしまった。なかなか戻って来た。3・11の時は会社の人たちも小学校に避難してきた。会社はほと津波の前、赤前には10社ほどの会社があった。運動公園の方にもあっ

来たので、体を暖めたりして看護をした。たどり着いたのを見て、先生方が3人くらい助けた。小学校に運んで勤めて退職した人だ。工業高校の方にも、人が波に流されて行って、にいる人を助けに行った。筏は2人で作ったという。1人は、漁協に津波のとき、この町内の人で、筏を組んで水が浸かっているところ

う。 の、 が下から湧き上がって来るのでどうしても飲んでしまうといて大変だということだ。水を1回飲むと、泥のために凄く具合が悪く取り上げられた。水の中では、冷たいだけでなく、色々な物が絡まっ行って引っ張ってきた。この間、NHKの放送でその助けられた話がまた、流されたお母さんを消防団が助けた。その際ロープを持って

げろと皆を誘導して避難させたあと、1人だけ残ってそのまま波に浚て野球場に入った。野球場の管理人が1人、地震の後、津波だから逃赤前は堤防があるから大丈夫だと思っていたが、大波が堤防を越え

われた。2回目の大波だった。波はそのあと3、4回来た。

防はあったが、今まで流されなかった所まですべて流された。変だ。十勝沖地震(昭和27年)の時は防波堤が無かった。今回は、堤~15㍍の波が、倍になった姿で流れ込んだ。湾の一番奥だから余計大に入って、かなり時間が経ってからこちらに来た。堤防を挟んで、10震源が宮城沖だったから、波は南の方から宮古の町にぶつかって湾

| 1947年)| 1947年 | 19

乗ってくれればよいと思う。にソーラーをやってもらうという計画がある。それらがうまく軌道にがある。宮古市にも、事業者に頼んで野球場の近くの土地で、実験的に来てもらって、赤前の田んぼを借りてソーラーをやろうかという案復興をどのようにするか、集まって話し合いをしている。大手企業

んでいるが、なかなか埒があかない。排水路の話を第一に進めてほしい。る。衛生上良くないから何とか水路を分離してくれないかと市にも頼ていて、用水も排水も一緒になって田んぼの中にすべて入り込んでいトラクターも入るのが嫌だと言う。また、昔の山からの排水路も壊れ田んぼは、土の中まで深く鉄くずが入っていて使いものにならない。田んぼは、耕すのが大変だ。家のあった地盤は固いから大丈夫だが、

が到達した境界地点(B地点)にて〉】(平成26年3月11日午後、防災備蓄倉庫付近の路上(A地点)と、津波【堀内光得さん(昭和12年生)と山根ひでゆきさん(昭和25年生)の話

〈A地点にて〉

[山根さん]

助けを求めていた。20以くらい離れていた。前下組の人だ。コンクリのアパートが津波でひっくり返って、そこでくれと言った人がいた。その人を堀内さんと助けた。助かった人は赤津波が来て直ぐのことだ。水に浸かった場所の屋根の上に、助けて

牡蠣の養殖に使う丸い浮きがそこにあった。

板は流れて来たものを

けた。 プが無かったら助ける事ができなかった。堀内さんが漕いで行って助を四隅にロープで結んで、乗っても大丈夫なようにした。また、ロー使ったが、浮きがあってよかった。板に釘を打って筏を作って、浮き

その人が助けを求めていたのは津波が来て直ぐだった。

・堀内さん

服もたくさん着込んで行ったので対応できた。大変だった。しかし、行く前に判断をして、きちんとゴム手袋をはめて、漕いで行ったが、途中、大きな瓦礫がたくさんあり、釘も出ていて

津波は、私はチリ地震(昭和35年)も十勝沖地震も体験している。 建った。 建った。 ・神勝の時はああ大丈夫だと思った後に、大きなのが来れば、後は来ない、来 の後は来なかった。だから、1回大きなのが来れば、後は来ない、来 の後は来なかった。だから、1回大きなのが来れば、後は来ない、来 の後は来なかった。だから、1回大きなのが来れば、後は来ない、来 でいるので、経験上、後は来ないことがわかっていた。そこに残って でいた山根さんと筏を作って、山根さんが筏の端に縛り付けたロープを けって、私が物干し竿で漕いで助けに行った。既に暗くなっていた。行っ でいたときの経験から、救助を求めている人は、人が近づくと安心し でいたときの経験から、救助を求めている人は、大きなのが来てしまった。そ 全然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ 全然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ を然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ ない、来 の後は来ない、来 の後は来ない、大きなのが来れば、後は来ない、来 の後は来ないった。その時の状況を知っ でいたときの経験から、救助を求めている人は、大きなのが来てしまった。そ と然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ ない、来 の後は来なかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ ない、来 の後は来ない。 でいたときの経験から、対助を求めている人は、大きなのが来てしまった。そ と然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ ない、来 の後は来ない。 でいたときの経験から、対助を求めている人は、大きなのが来てしまった。そ と然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ ない、来 の後は来ないった。 でいたときの経験から、対しているので、大きなのが来れば、後は来ない、来 を然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ ない、ま をがら、は、といい、ま は、私はチリ地震(昭和35年)も十勝沖地震も体験している。

[山根さん

が胸のところまで来て引き返した。 私も救命胴衣を2つ持って、それで引っ張ってこようと思ったが、水消防だって人間だから、飛び込めといっても飛び込めるものではない。な判断ができた。あんな時は普通、冷静な判断は無理だ。警察だってなかった。光得さんが来てくれて、こうしろと言われてはじめて冷静最初その人を見つけた時、岸辺に20人程いたが、誰もどうしようも

[堀内さん]

それからこちらに来た。来たら人がいっぱい集まって騒いでいた。コースでは2回目の波にぶつかるから、山を廻って豊間根まで行って、自分は、津波を宮古の町で見て、ここに来るコースを決めた。他の

[山根さん]

それに協力する人が必要だと思った。来た。災害の時は、今何をすればいいかを冷静沈着に判断する人と、で救急車も入ることができて、筏で助けた人も病院まで行くことが出の人がバックホー(掘削機)で叩いて通れるようにしてくれた。それがれ、完全に消防車も救急車も通れない状況であった。その道路を村また、部落の入り口の旭日屋旅館さんの前の電柱が倒れて道路が塞また、部落の入り口の旭日屋旅館さんの前の電柱が倒れて道路が塞

〔山根さん〕 う。直径40ホッくらいの丸い浮きが、30個くらいまとめて置いてある。〉 〈筏を作った場所(B地点)で、救助した現場を見ながら再度お話を伺

つけて、四隅に浮きを付けた。 てベニヤ板を釘で打ち この浮きを使った。流れて来た木を4本使ってベニヤ板を釘で打ち

その上こ[堀内さん]

で行った。 、洗濯竿が流れて来たのがあったので、それで漕い

[山根さん]

この一帯は全部湖だった。

[堀内さん]

[山根さん] ている。ここまで来ているのだと前から人に教えていた。 高さまで水が行っている。あそこにうちの田んぼがあったからわかっチリ津波の時は、工業高校はまだ建っていなかったが、あの地面の

来た。

たことはないと私も安易な判断をしてしまった。ところがその3倍も

今度の津波は、最初3以と言ったから、今の堤防からすればたいし

[堀内さん]

ここは全部田んぼだった。チリの時もすごかった。

† 大震災から4年半の時間を振り返って

大震災から4年半近くが経過した平成27年8月に、以前にもお話を大震災から4年半近くが経過した平成27年8月に、以前にもお話を 大震災から4年半近くが経過した平成27年8月に、以前にもお話を 大震災から4年半近くが経過した平成27年8月に、以前にもお話を

【村松岩蔵さんと奥様の話

〈平成27年8月28日午後、村松さん宅にて〉】

, 岩枢さん」

ていた。中学校の下に市営アパートがあったが流された。たくさんの世帯が入っ中学校の下に市営アパートがあったが流された。たくさんの世帯が入っ軒、5軒ぐらいか。中でも赤前下が、一番被害が大きかった。浜の方の、 そのうちで、家が多く流されたのは上・中・下だ。堀内のほうは4

上は津波で流された。 赤前上(かみ)の戸数は、当時は120戸くらいだったが、半分以

もいる。立派な家が流されてしまった。いた。千5、6百万かけて入って、1週間も経たないうちに流された人新開地だった。新開地に作った宅地に新しく家を建てた人たちが大勢て道路から下の、公園の方、野球場の前まですべて流された。そこは赤前中(なか)は、山沿いの道路から上が10何軒か流された。そし

合いの家は、2階建ての大きい家だったが、建てて6か月くらいで中組の場合は、建ててから10年以内の家が10軒ほどあった。私の知

組のアパートは、山寄りの道沿いにあったから流されなかった。流された。いくら大きな家でも波には勝てず、いっきに流された。中

されてひっくり返ったのではないかと思う。だ。もちろんあそこは、地盤が弱かったのだ。地盤が弱くて、波に押入っているものが、波の力でもろにひっくり返ったのだから凄いものであんなにひっくり返ったのかと言っている。コンクリートに鉄骨が下組の管轄の運動公園の近くの市営アパートは、市役所でも、なん

年たらずの家がほとんどであった。は古くて、下の方はほとんど新しい家ばかりだった。古くても10、20本前は、古い家というのはいくらもなかった。この道路から上の方

たと言う。新開地のところには家が建っていなかったからだ。 昔の人に聞くと、明治29年、昭和8年の津波では、家は流されなかっ

人様」

でも、波もこんなには来なかったという話だ。

[村松さん]

来なかった。だから建てた。過去の経験があるから。

[奥様]

私達の町内も、下の方まで家が建った。

「村松さん」

代行役で守ってくれた。田んぼだった。松林が、堤防の代りというか田んぼがあった。ずっと田んぼだった。松林が、堤防の代りというか道路より海に近い、今の運動公園が松林だった。そしてその南側にはて松林が津波よけということだった。松林が二重になっていた。下の明治29年と昭和8年の津波のときは、今ある堤防もなかった。そし

この松さ登ってな。昭和津波の時には、けつさらわれたんだぞ、洗っに残った。その場所で私達もその人から話を聞いた。「ほら、村松くん、松の木が転べばそのまま流されたのだが、松の木はそのまま流されず雄みたいな人がいた。松の木にしがみついて尻を波で洗われたという。波が来るというのでそこの松の木に上って津波を逃れた。そういう英昭和8年の津波の時、ちょうど浜の方に行っていた人が、地震で津

「古は゛っこぶ木゛っっし、予え易し゛っこう」てもらったんだぞ」と。大久保さんという方だ。

[野核]

そこで寒い時に体を暖めるのに砂をかけたりして遊んだ。と砂浜だった。和歌山の白浜のようにきれいな砂で、私達も幼い頃は、ここの松林の方が、陸前高田のより綺麗だった。その向こうはずうっ

村松さん

てきたのかも知れない。明治の人たちがそれを引き継いで守った。運動公園と陸上競技場、野球場を作って、そこで国体をやった。理動公園と陸上競技場、野球場を作って、そこで国体をやった。昭和45年に岩手国体があり、競技場を作ることになって松を伐採してきたのかも知れない。

点された。会回の津波で1本も松は残っていない。津波前は、松が一部残っていない。神はほとんど無くなったが、一部残っていた。防風林として残したも松がずっと続いていた。それが今回流された。野球場から池の所まで、その時も、防潮堤の裏に松の木がずっとあった。野球場から池の所まで、いた。私も、会社を定年退職してから7年間野球場の管理をやったが、いた。私も、会社を定年退職してから7年間野球場の管理をやったが、今回の津波で1本も松は残っていない。津波前は、松が一部残って

勢いがついていたわけだ。波の力というのは恐ろしい。堤防もやっぱらなにか残るはずだが、全く跡形もない。基礎まで流された。すごいたが、での家が全部、跡形も無く流された。普通に考えれば、堤防があるかたって松林のほうがよかったとも言える。今回は堤防が高くても、かえって松林のほうがよかったとも言える。今回は堤防が高くても、二重の松林を通って10㍍の高さのまま工業高校の方まで行くというの二重がから、10㍍で来たものが、

り考えて作らないといけない。実際、今度はそう感じた。

[奥様]

洗面所には野球場にあったポリバケツが残されていた。て、そのかわりに泥やヘドロや浜の茅のようなものが沢山残っていた。引き波も一瞬のことだ。一つの水たまりもなく、きれいに水がなくなっ思った。引き波の時は戸を外してみんな持って行ってしまった。その段を駆け上がって、上から2段目のところまで行った。すごい力だと玄関から入って来た水が、他の戸を閉めてあるから行き場を失い、階玄関が感じたのは、家の中の水の勢いだ。地震の時ちょうど家にいた。

[村松さん]

恐いのはガスボンベだった。宮古市全体のガスを供給する大きいガのだ。それにヘリコプター用の燃料が8本ぐらいあった。野球場で山火事用として液体を入れたポリバケツが千個以上あった

奥様」

ス会社が、赤前に2軒あったから。

赤前はそれが本当に恵まれていた。 火事にならなくてよかった。山田町はそのボンベで火事になった。

.村松さん]

方は大火になったのだ。く火が点いたら終りだ。それで山田のく火が点かなかったと思う。1本火が点いたら終りだ。それで山田の本当に恵まれたと思った。大きなボンベがバーンとぶつかって、よ

ている。まあ、何かに恵まれたのだ。 また、シューシュー音がしているボンベを、消防の人が元栓を閉めて回った。低地はすべて湖状態だからなかなか行けないが、消防の人たちがなんとか行って止めてくださった。家から流れたボンベは栓めて回った。低地はすべて湖状態だからなかなか行けないが、消防のかにあった。近地はすべて湖状態だからなかなか行けないが、消防のの海になっていたら大変だったが、ガス屋の対応がよかったのだと思の海になっていたら大変だったが、ガス屋の対応がよかった。ここが火を閉る。まあ、何かに恵まれたのだ。

赤前では、26人が亡くなった。すべて身元は確認できた。堤防があっ

た。その人がここで見つかった。たちは、夕方になると遺体置場を転々と見て歩いたが見付からなかっいた。この人は赤前の人だが、なかなか見つからなかった。身内の人私の家の庭先にも1人が流されていたが、しばらく気が付かないでたから、外海には行かないで多くは工業高校の方に流れていた。

[奥様]

それが3月27日か28日だったと思う。ありますと言っているうちに、今度は消防の人がすぐに来てくれた。見つけてから2分も経たないうちにお巡りさんが来た。ここに死体がて、ちょっと引っ張ったらひょっと手が出てきた。すぐに人を呼んだ。娘の旦那さんと家の庭の片付けをしていたら、何か赤いものが見え

木木で人

土が乾いたところで赤ちゃんを見つけたという。 ようだ。瓦礫を片付けようと思ってブルで畑の方へ入って行った人が、中学校のほうで見つかった。一番大きい波でそこまで持って行かれた見つかった。お母さんは工業高校のほうで、その赤ちゃんは一番端の見つかったが、その子はどこに行ったか」と話していたが、ようやくに1歳4か月になる子供が見つかった。「大変なことだ、お母さんは家の庭で見つかったのが、赤前の行方不明者の最後だった。その前

身元が判明した。 電柱が倒れてきていた。瓦礫が積み重なった下にいたという。すぐに 最後の発見は、さっき妻が言ったその人。その人の上に、向こうの

うやく出した。津波の力は恐ろしいものだと思った。川に入っていた。ボンネットを壊して、なんとかワイヤーをかけてよ出なかった。屋根が潰れるくらいに押されて、2台がぴたっと揃って人はいなかったが、消防の人が車を引っ張り出そうとしてもなかなかに人がいるのではないかと思って消防署の人達を呼んで見てもらった。それから家の近くの川に、乗用車が2台はまり込んでいた。車の中

た。工業高校の方まで。その昔は海だったのではないかと思う。何年昔は、赤前下(しも)から上(かみ)まで、ほとんど全部田んぼだっ

道路の近くまでずっと田んぼだった。か前の状況は、運動公園のほうに少し家があり、その上の方は山際の

獎 様 」

ないから。 就職して遠くに行っていると、跡取りでも帰って来るかどうかわからるとたいへんだ。子や孫がいっしょにいる人はまだいいが、子供達がしても、もっと若い時に来ていればなんとかなるが、高齢になってい立派な豪華な家を建てて、10年足らずで津波が来た。津波が来たと

[村松さん]

らないはずだ。あとは、津軽石の方の集合住宅は、50軒入れるようになっま前の高台には20軒くらい家が建つ。本当はもっと建てなくてはなてて、将来は子どもたちが帰って来ることを期待している人もいる。便設にいる人達が高台に家を建てているが、いま家内が言ったとお仮設にいる人達が高台に家を建てているが、いま家内が言ったとお

20軒の高台の一戸建ては、ほとんど赤前の人だ。将来を考えたとき、ている。赤前からそこに入る予定の人も多い。

アパート、県営アパートに入っている。借金してまで建てることはないという人は、仮設を出て、宮古の市営20軒の高台の一戸建ては、ほとんど赤前の人だ。将来を考えたとき、

体育の授業も学校の下の田んぼを埋めた所でやる。やっぱり行き来体育の授業も学校の下の田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動がでいる。やっぱり行き来

[) 以材

ほんとにいい先生方ばかりだった。

、木材でん」

,)域

いい環境だった。何か変ったことがあるかなど、いろいろ聞いてくれたりした。本当に何か変ったことがあるかなど、いろいろ聞いてくれたりした。本当にの所に配ってくれた。私の所にも奥様と2人でずっと来てくださって、だかの仮設に入っている人たち、次に主に活躍している町内の人たちだかの仮設に入っている人たち、次に主に活躍している町内の人たちご両親が作られた米を2㌔入りの袋に詰めて持って来て、70何世帯

[村松さん]

も生徒に事故がなかった。 本当に。先生方もみんなそうして協力してくださった。津波のとき

地震のとき、保育園の園児は2か所に分れていた。津波のとき建て

まず考えた。そちらは安泰だから、こちらの漁村地域センターにいた園児の避難を替えた新しい保育園にいたのは、卒業を間近に控えている園児だった。

た子どもたちも最終的には保育園へ行った。 学校に避難させた。年長組はそのまま保育園に残った。学校に避難し年下の保育園児は、漁村地域センターのバスと職員たちの自動車で小ところに地震が来た。だから、保育園の主な先生方はそちらにいた。ていない時だった。新築のほうで年長組が卒園式の練習をやっているに漁村地域センターを間借りしていた。まだ完成後の受け渡しは終った子どもたちも最終的には保育園へ行った。

るから水が勢いよく走る。路は水の道路なのだ。山にぶつかった水は遅いが、道路は舗装してあた。道路に上がって来ただけだ。道路は水が上がってくるものだ。道新築の保育園にも水は行ったが、中まで入らなかったから大丈夫だっ

本で、余ったものは東北電力に売るのだという。 またって、余ったものは東北電力に売るのだという。 最初、満員になったが、他所から来て入っていた若い女の人が、の田んぼの方にもどうだろうかと思っていた。また津軽石の、栄通りの田んぼの方にもどうだろうかと思っていた。まず、一旦あそこを作って、次に赤前の宅地があった場所にも作る予定だった。こことを作って、次に赤前の宅地があった場所にも作る予定だった。こことを作って、次に赤前の宅地があった場所にも作る予定だった。こことがよりに表別の近くに大陽光のソーラーの施設ができた。まず、一旦あその辺りにもいま作っている。宮古中が大のでは、は世帯は入れる。ほとんど赤前の人が入っなって、余ったものは東北電力に売るのだという。

ほうにもソーラーを設置する予定と聞く。

でいない。1社だけでなくという考えが宮古市にあるようだ。田老のすると結構広い。あの重茂線から向こうが、堤防までソーラーだから。みると結構広い。あの重茂線から向こうが、堤防までソーラーだから。みると結構広い。あの重茂線から向こうが、堤防までソーラーだから。みると結構広いたい終ったと思う。7月いっぱいということだったが、設置はだいたい終ったと思う。7月いっぱいということだったが、

田んぼで米を作っていた農家は、赤前の上と中で何軒もない。トラ

しなくては田んぼにならない。ずやらいろいろなものが土の中に入っているという。土の入れ替えをるのは無理ではないか。田んぼの持ち主が草刈りをやるのだが、鉄くクターも流されたから、震災後は誰も作っていない。田んぼを回復す

せないのだろう。問題でもあるし、赤前の問題でもある。市としてもなかなか方針は出問題でもあるし、赤前の問題でもある。市としてもなかなか方針は出前だ。だからその跡地をどのように復興するかということは、田老の津波で流されて、そのまま広大な場所が残っているのは、田老と赤

そういうこともあるから、市でも道路の分だけしか買い上げない。人たちのことは、農協が主体になっている。 帯の方に土地を提供するとの1世帯が反対すると大変だ。必ずそういう人が出る。赤前の人たちのことは、農協が主体になっている。 農協と農業共済組合があったは、何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 おび (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 ま前の人たちは、何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 あいら、何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 おいらに (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 あいら (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 あいらに (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 あいらに (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 あいらに (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 あいらに (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。 (何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。)

なってしまう。本当に大変だ。自分の土地でないようなものだ。何のために買ったのか、わからなくた土地には、建てられない。流されたところは、自分の土地であって、流された家は、それをどういうふうにするかが悩みの種だ。流され

生活を強いられ、これも大変だった。 高台の方は、土を盛って家を建てるとなったが、それまで長い仮設

かなければならない。 をご存知な方だ。とにかく、家が建ってもその後の方向性をつけていやっている。元赤前の分団長を何十年とやった人だから、赤前の事情赤前全体のことを知っていなくては大変だ。宇都宮拓治さんが会長で員に「町づくり検討会」の副会長を頼まれたが、本当に大変だった。家を建てるのも問題だが、その外にも問題が多くある。私は建設委

ソーラーを作るための土地は市が買い上げた。そして会社との提携

ンドなどは波が入って簡単に破壊された。 圧力を受けやすいと思ったが、根がよほど深く入っていたのだ。スタいい。ナイターの設備は、津波でも倒れなかった。正面だから津波の施設を作るなら、ここは気象条件もよい。だからナイターをやっても使うことができる。田老の球場は全部解体した。別の所に作るようだ。グラウンドは、ほとんど整備ができている。観覧席の椅子は直して

【宇都宮拓治さんの話

1は、平成27年の3月に土地が完成して、申し込んだ人たちに売

これらは高台移転だ。 られた。市が土地を買い上げて作った分譲地で、2か所合わせて26戸、

だ。 て、平成26年の10月に入居が始まった。 ほとんど赤前に住んでいた方々 それに公営住宅も建った。赤前の上地区の、浜から遠い所に14戸建っ

古市の農林課が主体となって何回も総会を開いている。地としてゆく計画がある。地権者の了解など難しい問題もあるが、宮それから平野の奥の工業高校がある方は、今度の区画整理事業では農野球場の前の旧県道も、そのまま残してもらいたいと要望している。

と競技場を守るために防波堤だけ設計変更するという。予算でできるということのようだ。野球場はそのままにして、野球場に作ろうという話も持ち上がったが、現在あるものを復旧すれば復興野球場と陸上競技場は、最初は海が近くて危険だからもっと高い所

たで作る。元々は野球場があって、その西側のほうに陸上競技場もあった。そので作る。元々は野球場があって、その西側のほうに陸上競技場もあった。そので作る。

「豆と主には、長刃は8gった。見正は8gであった。分下29月くなり本当に困った。来年の3月までには完成するのではないか。避難できるようにするためだ。今度の震災では、重茂に通じる道がな道路は新規にできる。片側一車線の広い道路だ。万が一津波が来ても新しい県道は、今の山沿いの道よりもっと下を通る。山の中の避難

になる。それを申し込んでいる方もあるようだ。になれば、津軽石の公営住宅や宮古市内の公営住宅も入居できるよう「仮設住宅には、最初は78戸いた。現在は38戸ぐらいか。今年の9月

ちで、赤前で今回流れた所に来て家を建てた人たちがたくさんいる。た人たちは大半、赤前に残るようだ。また他の地域に住んでいた人た大枠でみると、昔、赤前地区に生まれ育って、嫁さんをもらってい

以上は出て行くのではないか。んだ人たちだが、その方々は赤前にはいられないということで、半分土地が安いとか、眺めが良いとか、空気がいいということで、移り住

的に大変だ。 れば一般の県営アパート、市営アパートに戻らなければならず、経済 証人がなければ入れないし、5年間だけは減免になるが、それが過ぎ 人がいればローンを組めるが、高齢だとそれも難しい。公営住宅も保 高台に移るといっても資金で苦労する人もいる。家族に現役の若い

で、出稼ぎに行く人もあるという状況だ。 こっちは賃金が安いからオリンピックのほうに行けば高いということりに使ってこっちにこないというような風評もある。工事の人たちも、と言われる。建材も、今度はオリンピックも始まったからそっちばか建築会社にもっと安くやってくれと言っても、資材が高騰してだめだ価35万くらいで建っていたものが、いまは60万以上だろう。工務店や震災後は、建築費も跳ね上がったから大変だ。例えば震災前に坪単

だろう。税金でやるのだから。にもならない。東京の人たちはいいのだろう。でも東京も反対はあるきたのか。復興が終わってからやればいいではないかと。しかしどうたちは、みんな言っている。あんなオリンピック何のために今持ってタイミングがよくない。震災よりもオリンピックとは。被災した人

そして了解を得てやっているようだ。一応ある程度の要望は叶ってい度農地なら農地というふうに、関係者を集めて説明しているわけだ。市の要請で、各地域で作った。赤前、津軽石とか。津波の後に今後これをやった。役所のほうでは、それは補助の対象になるとかならないたから専門の人たちが来た。その人達が助言して検討した。宮古京の方から専門の人たちが来た。その人達が助言して検討した。宮古ここでは20名くらい。その方々が一切やった。行政だの、それから東ここでは20名くらい。その方々が一切やった。行政だの、それから東に町づくり検討会」は、震災後に各地区から人選して作った。会員が

細かい事柄もあるわけだ。 るわけだ。それでも将来的には、話し合わなければならない、もっと

はわからないから希望をとった。希望の変更もいろいろあった。ではだいたい設計ができていて、何坪・何坪と決まっていたが、我々かという希望をとった。それで申し込んだ。その時はもうすでに役所高台は、最初から希望をとった。100坪の宅地をほしいか、80坪

いっても、順序があってなかなかそうはゆかない。今工務店さんにお願いして工事が始まるところだ。早くやってくれと私は4年半仮設に住んでいるが、高台を申し込んで土地が決って、

ではそこは造成しないわけだ。ちらへ行くとか、そういう方が出てきて空き地ができた。それで役所はいらない、公営住宅に入りたいとか、息子が仙台の方にいるからそ役所が区画を個人から買収した。そして1年か2年経ったら、いや俺最初希望をとって、むこうの高台の場合など、最初30何名とかあって、

び山やかこなった。 仮設住宅の生活は、すべてが大変だった。高台移転にしろ、公営住 のが。もう4年何か月ここにいる。早く何とかやっていただきたいと のが。もう4年何か月ここにいる。早く何とかやっていただきたいと のが。もう4年何か月ここにいる。早く何とかやっていただきたいと をにしろ、そこに移るまでに年月がかかるということが大変だ。待つ にひきにしろ、そこに移るまでに年月がかかるということが大変だ。待つ

30年に撤去ということで、人数が少なくなってきて集約されて、市内それでもここの仮設も来年の8月あたりで終りになる。平成28年からしている。高台に行けばそれも買わなければならないし、銭はないしと。茶碗も座布団もあったのにとか、何もかもなくなったという話ばかりの話が出る。津波の前のことを話す。あれもあったのが流されたとか、でもやはり津波さえなければという気持ちはある。5、6人集るとそ

早く壊すことは覚悟していた。が何か所か集約場所として残るようだ。ここは小学校の校庭だから、

だった人もいる。堀内の人も2、3人いる。 仮設には、生れてすぐに津波に遭った子や、当時中学生とか高校生

は来ないからと。屋敷を持っていればまず堤防と言えるが。住む場所を先にしてくれと言う。今から津波は500年や1000年被災者は、堤防は何も急いでやることはない、ゆっくりやれ、人が

んて言っている。今度は違う人達と一緒だからと、そう言っている。私の知り合いにも公営住宅に行っている人が、仮設の方がよかったな同じ仮設にいて、大変な目に遭って助け合ったから、仲間意識がある。

あうまくやってきたと思う。 はできた。4年半を振り返ってみると特別なトラブルもなく、まあまけできた。4年半を振り返ってみると特別なトラブルもなく、5月中にが話して、駐車場を今あるところに借りて、住宅の面積を倍にした。が話して、駐車場を今あるところに借りて、住宅の面積を倍にした。の働きかけが良くて仮設住宅が早くできた。県の計画では、敷地の半の難難所の生活は、仮設ができるまでのほぼ2か月だった。校長たち

生達は海が見えていいところだと喜んでいた。どを演じる人もいっしょに来て、この集会所で公演もしてくれた。学たりした。震災の翌年辺りから3回か4回か来ている。ハンドベルな壁の写真にあるように、青山学院女子短期大学の学生さんたちが来

まとめ

大きな津波が来た時には必ず被害を被ってきた。 赤前・堀内の集落は、宮古湾の南の突き当りという地形上の関係から、

当時は砂地の南の平地のほとんどは田んぼであった。また、砂地と田ど)走って、平地東南の山際の集落にまで到り、人と家屋を飲み込んだ。上げた波の高さは5㍍ほどで、その波は平地を480間(870㍍ほきな被害が出た。当時は陸地と海との境は砂地であった。陸地に打ち明治9年の三陸沖地震の時には、死者20人、流失家屋23戸という大

いる。 それ故に樹木がないところには緊急に松を植えるべきことを提案してり」とあり、この松原が津波の勢力を弱める効果があったことを述べ、は、「松原 今回津浪ニハ大ニ効奏せり 樹木無キ所 植付ハ方今ノ急務ナは松が植えられ、松原となっていた。宮古測候所所蔵の当時の資料にんぼとの間の、それ以前の経験から波が来やすいと考えられた部分に

くてすんだ。 んだが、集落が平地の東南に位置していたために、被害は比較的少なんだが、集落が平地の東南に位置していたために、被害は比較的少ないう被害であった。津波の高さは5・6㍍、浸水は平地のほぼ全域に及 昭和8年の三陸沖地震の時には、行方不明者1人、流失家屋3戸と

襲来の方向とその経路について、当時の農林水産局の「三陸地方津浪災害予防調査報告書」は、津浪

- 襲来シ夫等ノ余波(返シ浪)ハ逆ニ磯鶏村金浜及高浜部落を襲ヒ「北方ヨリ襲来セル浪ハ赤前部落ノ前面ヲ真直ニ砂浜及松原ヲ超へ

レタリ従ッテ漁船モ同様ノ運命ニ遭遇セリ」共同製造場及倉庫等ハ破壊セラレ其残骸ハ防潮林ニヨリ喰止メラカハ比較的少ナカリシガ防潮林ノ前方砂浜ニアリシ個人製造場及「宮古湾奥ノ沿岸ニハ防潮林が植付ケラレテアリシ為メ浪ノ侵入勢と記し、津波前の沿岸の設備が津浪災害を防いだ状況については、

と記している。

この記録によって伺うことができる。林が、思わくどおり、昭和8年の津浪の被害を小さくしたという事実を、ての機能を高く評価している。明治29年の津浪の後に行なった松の植明治29年の報告と同様、昭和8年のこの記録も、松原の防潮林とし

衝地区タル津軽石平野ニ津浪ヲ誘導セントス」
「本部落ハ宮古湾奥部南側ニ位スルヲ以テ津浪ノ主動向ニハ直面セ「本部落ハ宮古湾奥部南側ニ位スルヲ以テ津浪ノ主動向ニハ直面セた、同報告書は今後の災害予防について次のような提案をしている。

るところである。

隣の協力が大きかった。 地震直後、高台にある赤前小学校の体育館が緊急避難所となった。 地震直後、高台にある赤前小学校の体育館が緊急避難所となった。 地震直後、高台にある赤前小学校の体育館が緊急避難所となった。

解決されていないという事実を反映しているものである。 世帯は半分以下に減少している。しかし、5年の歳月を考えると、こ世帯は半分以下に減少している。しかし、5年の歳月を考えると、こなされた。震災から満5年の日が近づいている現在、仮設住宅の入居なれた。震災から満5年の日が近づいている現在、仮設住宅の入居をおいための工夫が、の後、小学校の校庭に仮設住宅が造られ78世帯が入居した。入居

で土地改良を行なって耕地を復活した。今回は、津波の規模も大きく、の平地を襲って耕地が駄目になったが、その都度住民の自主的な努力昭和8年の三陸沖地震の時も、昭和35年のチリ地震の時も、津波がこの広大な平野の部分を、どう有効活用してゆくかが大きな課題となる。この地域の今後の復興を大局的に考えた場合、津波に侵された赤前

らであろう。